ASA OKITARA
TONARI NI
BISYOUJO GA
HAETEITA KEN
朝起きたら
隣に
美少女が
生えていた件
R18
TSF
KURUNDA
PRESENTS
2022 COMIC MARKET WINTER

朝。
男の一人暮らしの部屋の遮光精度がとても低いカーテンの隙間から朝日が差し込む。
ただ、若い男の一人暮らし。そんな朝日程度で目が覚めるはずもない。
今日は大学の講義もなく、バイトもなく、惰眠を半永久的に貪れる日なのだから。
しかし、習慣とは恐ろしいものでほんの少し目覚めに意識を振っただけでいつものようにスマホの時刻を確認しようと手を伸ばす。
「あがッ……」
自分の掌が何かにぶつかり、そのぶつかった先がなんとも言えない音のような声のような物を上げた。
ベッドに寝具以外を置くような杜撰な暮らしはしていないはずだ。
「んん……？」
まだ眠っていたい気持ちをほんの少し……待ち合わせに遅れたくないが為になんとか気力を振り絞って起きるかのように……理性を持って眠気を吹き飛ばして目を開ける。
男の顔があった。
意味が分からない。
けれども、男の顔が自分の目の前にあった。
掌はばっちりと男の頬の上に置かれている。
「な、なんじゃこりゃあ!?」
男と一緒に寝る趣味はない。自分の性癖は至って真っ当だ。
バイト代を貯めて、数ヶ月に一回風俗に行くレベルには真っ当な性嗜好のはずだ。
金が無くてそれでもどうしてもセックスがしたくてたまらないときに、相手の合意を得られればセックスができるようなセフレは一人いるけれども……。
いやそうじゃなくて。

昨夜はいつものように安酒を呑んで寝たが、見知らぬ男を家に上げるような暴挙はしていない。
そもそも日付が変わって数時間経った頃に眠気が来て寝入ったはずだ。
それがなぜ？
眠気でモヤがかかった頭が一気に覚醒する。
例えるならスマホの時間を見たらバイトの時間の数分前に起きたときに味わう絶望感のようなそんな感じだ。
一気に脳がフル回転していき、ガバッと身体を起こす。
ゆさっとした重みが胸の辺りにあった。
はらりとした軽さが背中にかかった。
「んん？」
ちょっと意味が分からない。今まで感じた事の無い感覚に戸惑いを隠せない。
視線を下げる。
白く透き通るような肌に、細やかながらも二つの膨らみが見えた。
全くもって意味が分からない。
自分は男である。男であるはずだ。
首を横に振る。
男が一人寝ている。来ている衣服は昨日自分が来た寝間着である。
よくよくみると、自分の顔ではないか？
「はっ……えっ？」
顔をぺたぺたと触る。
触ったところで変化は分からないけれども、指の細さと吸い付くようなもっちりとした肌触りが返ってくるのだけは分かる。

恐る恐る手を胸に伸ばす。
細やかにある膨らみは手に込めた力を吸収するかのように身体に沈んでいく。
それは紛うことなきおっぱいであった。風俗嬢と楽しむ時に感じるあの感覚そのままであった。
それが自分にある、ということは。
「お、女になってる……？」
断定はできない。
けれども、視線を下げれば胸の膨らみとすらりとした腹部と臍の窪みも見えてくる。
「え、えええぇ……」
困惑しながらベッドから這い出て、洗面所へ向かう。
寝る前は来ていた衣服は全く身につけておらず、歩けば太股に当たる男の象徴の張り付きを全く感じない。
鏡を目の前にして愕然とした。
身体が変わっているのは分かっていた。
しかし一縷の望みをかけてはいた。
でもそれは打ち砕かれた。
鏡に映るのは自分ではない自分だ。
同じ動きを鏡映しに行う自分。
煌々と光る照明に照らされた肢体は、美しく、まずお目にかかれないレベルの身体付きだった。
端的に言えば、自分好みの少女然とした美少女がそこにいた。
あどけない顔立ち、おっとりした目付き。血色が良くそして唇は薄く小さい。
首筋から肩にかけてはほっそりと、抱きしめれば折れてしまいそうに見える。
胸は派手に主張はしておらず決して巨乳ではないがそれでも確かに膨らみがあり、桜色の乳首が外気に

触れてつんと立ち上がり主張をしている。
「ど、どういうことだって……」
自分に男であることの記憶がある。
名前は凜空。昨日までは確実に男であった。
慌てて部屋に戻り、ベッドに眠りこける男を見る。そこにいるのは鏡で良く見た男の顔……つまり元々の凜空である。
「な、なんなんだよこれ！　おい、起きろ！」
未だにむにゃむにゃ言っている自分の顔をした男を揺すり、起こす。
朝のこの時間帯は大分眠りが浅くなっているから、ちょっとした刺激でも起きる。
それは自分だからよく分かっている。
もし、中身が自分ならという前提だが、そう思いたい。
「んあ……？」
薄らぼんやりと目が開くのが分かる。
「裸の、女……？」
自分の身体から出る聞いた事の無い自分の声。とてもじゃないけれど気持ち悪いが、今はそれどころではない。
そして、指摘されて気付いたが、確かに全裸である。今おそわれたらひとたまりも無い。
身体自体は女なのである。意識は男だが、男だから故に危機感を必要以上に感じてしまった。
「お前、誰だ……」
あまりにも予想通り。
落胆と脱力。
「んー……夢か」

男の一言にがっくり肩を落として、呆然としていると、目の前の男は寝ぼけているのか自分の身体に手を伸ばしてきた。
男の大きな手が、胸に伸びる。そして触れられる。もう片方の手は腰に回され自身の身体が男の自分の元へと引き寄せられる。
身の危険と盛大な嫌悪がこみ上げてくる。
「うへへ……俺好みの美少女が目の前にいるなんて夢しかあり得ないもんなあ」
顔を腹に埋めようとして来たところで、限界が来た。拳を握る。小指から絞り込むように、目の前の男の目を覚まさせるために。
「いい加減！　目を！　覚ませ！」
勢い任せに振り抜いた拳から肘に掛けて衝撃が抜ける。渾身の一撃だ。今まで放ったことのない最高のゲンコツをかませたと思う。
張り付いていた顔が床に落ちる。助け船を出してやる気はない。自業自得であるのだ。
「いってぇ……」
殴った頭をさすりながら、男の自分が顔を上げる。そしてようやく目が合う。
「ええと、どちらさまですか……」
目の前の男からの反応は困惑。
わかる、わかるが、困惑しているのはこちらもそうだ。
「俺はお前。お前は凜空か？」
「うわ、美少女からドブみたいな声が出てる……」
「失礼すぎん？」
「すまん、寝起きだから……」
この寝起きのデリカシーの無さは自分でも自覚しているが、やはり目の前の男は自分であり、こうやっ

て意識を持っている女の自分のまた自分であるのだろう。
改めて問う。
「自分の寝起きがヤバイのは自分が一番理解してるからいい。改めて聞くけどお前は凜空だよな？」
「見知らぬ美少女が自宅の中にいて、俺に問いかけてくる。マジで夢なんじゃないか……」
「いいから答えろ」
目の前の自分が呑気なのに対して、今の自分はとてもじゃないけど余裕がない。
それが対比として表れている。
まあ、そうだ。こっちは変化した側、向こうは日常の延長線上の特異な朝なだけなのだから。
「そう怒らんでも……。まあ、凜空と言われればそうですとしか」
返答を聞き、一つの納得を得る。
頭が痛くなってくるが、どうもこれは現実らしい。男のままの凜空と、何故か増えて女になった凜空の自分。
「……なあ、俺も凜空なんだけど」
「は？」
「まあ、そうなるよなあ……」
すっとぼけた返答が戻ってきて、少しだけ冷静になれた。
そして大分目が覚めてきたらしい男の自分の視線が身体を舐め回すように見ている事に気付いた。
なので適当に積んである洗濯した衣類からシャツを一枚選んで着る。
「あっ！」
「見てるのって分かるもんなんだなあ」
「はあ……」
男から大きい溜息。

溜息をつきたいのはこちらである。
「んで、まあ今の状況の説明なんだけど――」
起きてからの状況と、そしてお互いの昨日の確認をした。
お互いの情報を照らし合わせると、昨日寝るまでの記憶は確実に同じ物だった。
だからこそ自分は朝起きると突然生えていたということになる。
「なんでそうなるんだよ……」
「なあ、そろそろドブみたいな声で喋るのやめないか」
「普通に喋ってるだけなんだが……」
「声帯の使い方が男の喋り方のままだからじゃないのか」
「あー……。確かにちょっと喋りにくい感じはあるな」
変にダウナーな感じで喋っているせいか、喉に大分負担がある気がする。
少しだけ声を出す位置を変えて、男の時でも知らない人と喋る時のような愛想を振りまくイメージで、
「あ、あー。こんなもんか」
声を出すのが楽になった気がする。
「うん、いい感じ。エロイ」
「美少女から美少女ボイスが出ればそれは最強だし、まあ男の俺の言う事も正しいな」
「口調も変えない？」
「遊んでるだろ。こっちは混乱してるってのに」
状況の整理ができて少しだけ冷静になることができた。軽口を叩けるのがその証拠だ。
「まあ、いいや。これからどうするよ、男の俺」
「どうするかねえ……とりあえず仕送りと貯金で金はあるからいいとして、まずは女の俺の身の回りの物を揃えるところからか？」

どうやら、女の自分を見捨てるという選択肢はないらしい。自分の事だからそれは無いだろうと予想は出来ていたけれど、本当にそうなるとは。
「てか、男の俺とか女の俺とか紛らわしいな」
「それもそうだな」
「じゃあ、女の俺が凛で男の俺が空な」
名案とばかりに提案する。
折角名前の中に女っぽい名前があるのだから、それを利用しない手はない。
「女の名前名乗るなら、頑張って女らしく振る舞うことを約束するなら許可しよう」
「どうせ外じゃ、お前、凛空って呼ばれるだろうが。家の中での俺の呼称を凛って呼べばそれでいいんだよ」
「まあ、それもそうか。でも折角俺好みの美少女が目の前に居るので、美少女然として振る舞って欲しいです。逆の立場になって考えてみてみ？」
顎に手を置き一時の思案。
「……一理あるな」
結局思考回路は同一人物なのだから、お互いの好みは理解しているのだ。
完全に話ができる自問自答の状態である。
まあ、だからこそ思っている事を肯定してもらえるというのは良い事だ。
「あーでも、ちょっとまって、流石に美少女然とした振る舞いをしている自分を想像したら、ちょっとどころか大分恥ずかしい」
「ぐへへ、凛ちゃんかわいいねえ」
眉間に自然と皺が寄り、嫌悪と侮蔑が目の前の男に向かう。男の自分ってこんなにキモかったのかと客観視出来て残念な気持ちになる。

「流石にそれはキモいから辞めろ、空」
「はいよー、とりあえずは身の回りの物だな。さっきもいったが」
あっけらかんと切り替えて、空は言う。
「あ、それと流石に俺は無しで。頑張って私って言ってくれ。追い出さない代わり最低限のルールなー」
「ん、ああ、分かった。どうせバイト中は私だしな、それに抵抗はない」
美少女に俺なんていう一人称は合わないという気持ちはよくわかる。だからすぐ様私はそれを承諾した。
そして安堵から肩を落として一息を吐く。
目の前に居る男が自分で良かったとひしと思う。話が通じる。自分の事だから勝手がよくわかる。後ろ盾が何も無い状態に比べたら恵まれている。
「やっと眉間の皺が取れたなー」
空が言う。
それに私は改めて自分の眉間を撫でる。
「大分思い詰めていたようで。そんなに急に女になったのが応えてるのか？」
「どうだろうな。まあ焦ってるのはあると思うよ。逆にお前はどうなんだ？」
「急に美少女が生えてきた、それだけ」
「ああ、まあそっか」
元々の主体は男の方なので、男の方からすれば勝手に女が生えてきた。
そういうことだ。
だからびっくりはすれども焦りは感じない、と。
ずっりいなぁ……。
「はあ、とりあえずなんか買ってきてくれよ。お……私の服と寝間着と下着と日用品一式」
「まだ朝の八時にもなってないじゃん……」

枕元に充電器を刺しっぱなしでおいてあるスマホで時間を確認した空が呻く。
「ぐえー、じゃあ風呂入るからちょっとコンビニ行って朝飯買ってきてくれ。できれば一時間くらい掛けて」
「いやなんで一時間も。コンビニすぐそこじゃん。五分だよ」
「お前、分かれよ！　お前は俺だろ!?　女になってんだよ……」
やっと心持ち落ち着いたから、今度は女の身体というものに対しての欲求が湧いてきている。
暗にそれを伝えると、空はニヤリと気味の悪い笑みを浮かべて私を見るなり、
「あー……察しました、察しましたよ。ごゆっくりお楽しみください。後で感想聞かせろ」
「ぜってぇ嫌だ」
私の悪態を聞きながら空はベッドからのそりと起き上がり、洗面所に向かって行った。
洗面所から水の音がし、暫くして部屋に戻ってくると洗濯したものの山から適当に服を取り出し着込むと、
「それじゃ出かけてくる。鍵を掛けておくことと、俺が帰ってきて寝てたら襲われても文句言わないこと」
「お、襲われる可能性もあるのか」
流石に男に襲われるのは嫌なんだけど。
「あのさ、凛ちゃん、鏡見たでしょ？　その顔と体つき、どう思った？」
「まあ、控えめに言って最高」
「だろー？　無防備で寝てたら？」
「据え膳は食いますねえ……」
「そう言う事」
例えばこれが赤の他人なら話は別だろう。しかしお互いの共通認識で、自分であると納得出来ているのだ。

そりゃあ、無防備に眠っている最高に自分好みの美少女がいたら、まあヤることヤるわなあ……。
処女だろうがそうでなかろうが無責任中出し決め込むし、体中のありとあらゆる場所を触るし舐めるし、穴という穴に突っ込む可能性もある。
あー……想像したらちょっと変な気分になってきた。いつもならその想像でチンコが甘勃ちするところだけれど、そう言うのじゃ無くてもっと奥の所が変な感じになっている。
「まあ、だから気をつけて。凛ちゃんも俺だって言うなら俺の思考回路くらい分かるでしょ」
そう言って、空は出て行った。
ガチャリと重い鉄の扉が閉まり錠が掛けられる音を耳にする。そして徐に立ち上がると、私は空の視線から逃れるために適当に羽織ったシャツを脱いだ。
裸のまま部屋の隅に置いてある姿見を部屋の中央まで移動する。
……部屋でシコる時に鏡に自分の姿が映るのが嫌だから、身だしなみの確認するときもあそこまで行ってたんだよなあ。
しかし、今はそうではなくて自分の姿が見たいのだ。だからこそ部屋の中央に姿見を持ってくる。
ほんの少し埃被った姿見の埃が身体に掛かってしまい、気持ち悪さを覚える。
最高の美少女が埃に塗れた状態で鏡に映るのは良くない、非常に良くない。
「風呂入るか」
名案だ。湯船を張っている時間は無いからシャワーだけれど。
四二度に設定したお湯を触ると、指先に感じる熱はいつもより熱く感じた。
そんな熱を感じながら男らしく頭からシャワーを浴びる。そこで背中まで伸びた髪が水気を含んでぴったりと身体に張り付く感触が余りにも体験したことのない感触で、少しだけびっくりした。
シャワー掛けにシャワーを掛けて、流れるお湯に合わせて自分の身体を撫でる。
細い首、細い肩、浮き出た鎖骨。胸の膨らみがはっきりと有り、男の物よりも数段と大きい乳首と、乳

輪が理想的なバランスで最高にエロく見える。
そして支える物が無く重力に任せるがままの胸にも確かに谷間がありそこから見える下腹部には一切の毛が見当たらず、割れ目の起点がほんの少し見えるだけだ。下腹部に手をやり、割れ目を開いてみようと思ったが、それは風呂上がりのお楽しみに取っておきたい気持ちもある。
明るい日の日中で見る自分のマンコはどんな物なのだろうかと、期待だけが膨らみ下腹部の奥底が疼いてくる。
「はあ……早く触ってみてえなあ……」
人様の物はそうマジマジと見る物でも無い。意思疎通が図れない相手なのだから遠慮が入ってしまうし。風俗なんて照明が暗いところが多いからそれこそ良く見ることなんてできない。
セフレとは、ヤりたい。今日ヤれる。それじゃヤろうという、本当にお互いに性欲、肉欲が噛み合ったときにどちらかの家でヤる感じだ。勿論お互いに気持ちよくなりたいからキスもするし愛撫もする。付き合っていて気楽ではある。お互い身体の隅から隅まで見ているし、なんなら性器の造形すらも頭の中に浮かぶ。でも、結局一回のプレイで見る時間なんて一〇分も見る物では無い。
そんな物をマジマジと観察できるし、遠慮なく触れる。それも一時間もたっぷりとした時間があるのだ。
シャワーを浴びている時間が勿体ない。
身体が温まったのを感じると、バスタオルで水気を取り、洗面台に置かれているセフレの忘れ物である髪ゴムで邪魔にならないようにざっと髪を二つ結びにして、そのままさっき羽織っていたシャツを着直して部屋に戻る。
そしてそのまま姿見の前に陣取る。
まず目についたのは、スレンダーな腰回りだ。
くの字を描き見事なまでにくびれができており、臍は縦に綺麗に伸びていた。胸から尻までのラインは見事と言うほか無いほどにモデル体型だ。均整の取れた肢体はトップレベルのＡＶ女優もかくやと言わん

ばかりの体つきだ。
「うわ、エッロ……」
思わず声が漏れる。
首を振り、鏡がなければ見れない場所にも目を向ける。髪以外のムダ毛は全部脱毛でもしたのかと言わんばかりに、無駄な毛が一切生えていない。腋なんてこのすべすべさなら永久的にでも舐め続けたい位に綺麗を通り越して美しかった。
そう、完全に自分の妄想から抜け出してきた完全無敵で理想通りの美少女がそこにいた。中身の性格が自分であるという点だけが完璧にマイナスではあるが、それでもそれは自分が理想の美少女を演じればいいだけの話ではないだろうかと、自問の心が浮かぶ。
光を反射するような光沢を帯びた爪は男の物のように無骨ではなく、白魚のようなほっそりとした指先を血肉そのもののサーモンピンクに彩って艶めかしい。
女が爪を飾る意味が今少しだけ理解出来た気がした。そんな指先が、僅かに膨らむ胸に添えられる。ほんの少し指から伸びた爪先が肌に食い込む。
痛みよりも女の身体になった自分の胸を自分で揉んでいるというシチュエーションに興奮を覚える。指先に力を込めると、綺麗な流線状の胸が崩れ込めた力の分胸に指が沈み込んでいく。
ぞくり、ぞくりと背筋に電流が走る感じがする。
鏡に映る美少女が、自分の意思で胸を揉んでいる。その様が余りにも背徳過ぎて、本当にいいのかという気分になる。
しかし目の前に居るのは自分だ。
自分なのだから好きにしていいに決まっている。
鏡の前にバスタオルを敷いて、そこに座る。座り方もいわゆる女の子座りという物を試してみた。足が横に広がり、ぺたんと股が床につく。

その際に開いたであろう秘裂とバスタオルが擦れ言い様のない快感が襲ってくる。
「あっ♡」
勝手に漏れた声に慌てて口を塞ぐ。
……なんなんだよ、これ！
男の時とは全然違う快感に身震いするしかない。
睾丸から昇ってきた精液がこみ上げてくるような射精感ではなく、お腹の奥底から溢れてくるような快感。受ける快感の質が全然違う。
「女ってずりぃ……」
独りごちて膝を立てる。
お楽しみの始まりだ。
尾骨の所で座るように腰を出し、大きく立てた膝を広げる。自分では一切見ることが敵わなかった秘部が鏡に映し出される。
色素沈着していない、自分の肌の色と全く同じ色をした陰部。そして閉じた割れ目からほんの少しだけ顔を覗かせている花びら。その下にはきゅっと窄まっている尻の穴があった。
鏡に映る自分の秘部をマジマジと目にして、ごくりと生唾を飲み込む。力を入れれば尻の穴が連動して窄まり、力を抜けば花開く。まるで呼吸しているかのようでこの姿を見ているだけで、快感が溢れてくる。
自分の身体なのに、自分で目茶苦茶にしたい。顔に、口に、胸に、腋に、臍に、恥丘に、陰核に、太股に精液を掛けて、真っ白にしたい。
中に大量に精を放って、それが膣口から溢れてくる様をマジマジと眺めていたい。
絶対に一回のセックスが一回の射精で終わるわけがない。一度始めれば金玉の中の精子が枯れ果てるまでヤり続けられる。そんな極上の身体だ。
想像した行為にぶるりと身震いした。

鏡の自分を見ていると、閉じた割れ目の隙間からきらりと雫が盛り上がってきている。
「嘘だろ……想像だけで濡れるの……」
妄想の中で汚した自分の姿で身体が反応している。溢れてきた愛液を救うとその雫が糸を引いて主張してくる。
……もう、シてもいいよな。
片方の手で割れ目を開くと、肉色の孔が、男根なんて到底受け入れる事ができそうにもないように見える小さな孔が開き、自分の呼吸に合わせて蠢いている。
「んぅ……」
男の先走り汁のようにほんの少し溢れてきていた蜜を、指に絡ませようとして蜜孔に触れた指先の刺激で声が漏れる。
「ヤバイヤバイヤバイ……」
今からしようとしている事、それを想像して興奮する。そしてそれが、全身を性感帯にでもしているかのようだ。秘部に近しいところに触れれば身体に快感をもたらしてくる。
ねっとりとした蜜を指に絡ませ、開いた花弁の中をなぞり上げていく。
そして指先が割れ目の頂点に達した時。
「――ッ！」
胸を揉んだときの比ではないほどの刺激が、電流となって陰核から背筋を通って頭の奥底まで駆け抜けていく。
「やば……これやば……」
こんな刺激、女はどうやって耐えるんだよ……。
風俗嬢も、セフレのあいつもどうやってこの刺激を耐えてるんだよ……。
自分には耐えられない。

気持ちよすぎて無理。
頭が真っ白になる。
こんな刺激、セフレと遊びでやった連続射精ゲームで亀頭を唾液とローションで刺激された時に受けて以来だ。あれも随分と腰が引けてしまう程の気持ちよさだったが、あれはそれなりに長い時間の刺激を与えていたからと言うのもある。
しかし、これはほんの少し撫で上げただけで感じた物だ。
女のオナニーはこれから始まって随分と時間が掛かる物だと言う事は知っている。
しかしこの刺激がずっと続くというのは、頭が耐えられる気がしない。
恐い、けど、抗えない興味がある。
そして、好奇心に簡単に負けてしまった。
ほんの少しだけ見えていた芽に被った皮を剥きクリトリスを露出させる。
秘部の中で感触の違うソレを、コリッ、コリッと指先で撫で繰り回す。
「あっ……ひっ……」
刺激に腰が引ける。けれどもその刺激から逃げたくなく、感じ入りたい性欲が指を動かして、何度も何度も、コリコリッと充血したクリトリスを刺激する。
「い……イク……ッ」
一際強い刺激が、頭の芯まで駆け抜けていくと同時にビクンビクンと自分の意思とは裏腹に腰が派手に浮く。
鏡に映る自分がだらしない顔をしている。
これが女の絶頂。
男の刺激を重ねて重ねて重ねて、堪えきれなくなったところで放出する射精とは全く違うメカニズムだ。
快感が溜まりきったところで器が割れるような、そんな感覚。けれどもすぐさま次の器が用意されてい

て、水が少しだけ溜まっているような、そんな感じだ。
つまり、ふわふわとした心地よさをそのままにまだまだ連続でできそうだというわけだ。
賢者タイムが全く訪れない……。
「うわ……すげえことになってる……」
ほんの少し戻った理性で、鏡に映る自分の姿を改めて見ると、膣口からだらりと愛液を垂らす姿が映っていた。
「バスタオル敷いておいて良かったあ……」
そう独りごちて、
「今なら指入れれるのでは」
好奇心が湧いてきていた。
処女の初めては痛いと聞く。そして、きっと自分の処女であろうと思う。女になって数時間、男性経験はない。男の時に女性経験はあるが、非童貞だからといって非処女という訳ではないからだ。
じゅくりと濡れそぼっている蜜孔に、中指をあてがう。そして恐る恐る指を沈めていく。
「……？」
中に異物が入ってくる感覚はあるが、ただそれだけだった。気持ちよさはあまり感じない。
クリトリスの刺激が劇的だったから、中に入れたら相当だろうと思ったけれどもそうでもなかった。期待外れもいい所だ。
じゃあ、なんで女はセックス中男にピストンされて喘いでいるのだろうか。
演技の一部というのもあるだろうが、流石に全く気持ちよくなかったら声すら出ないだろうし、あのセフレだって、セックスに誘ってＯＫを出すことなんて無いだろう。
そう思ってよくよく自分の指を入れている蜜孔を見る。指一本ではほんの少し隙間ができている。しかし二本入れるには孔は随分と小さい。

「でもここにチンコ入るんだよなあ……」
そうぼやきながら中の壁をぐるりと一周撫でる。
「ふあっ……！」
粘度の高い蜜が指に絡みついていたから全然気にしていなかったが、指自体は孔の中に入っただけで何一つ中に刺激を与えていなかったのだ。
身体の中を弄られる不快感に思わず顔を顰めてしまう。
「いや、いやいやいや……えぇ……指入れるの恐すぎん？　なんで女ってこれが平気なの……。男ならケツに指突っ込まれるようなのと大してかわらんだろ……」
慌てて指を膣から抜いて、濡れた指をバスタオルで拭く。不快感に萎えてしまって、もうこれ以上何かする気も無くなってしまった。
「萎える時は一瞬だなあ……」
これは男も女も大して変わらないなというのが感想だった。
鏡の前の後始末をする。
そして、鏡を動かす気力はなかったから、そのままにして改めてもう一度シャワーを浴びる。浴室から戻り時間を見ると、空が出て行って既に二時間くらいが経過していた。
「いくらなんでも帰ってくるの遅くね？　ほんとに服でも買って来てんのかな」
いや、そんなことはないだろう。
自分で言って頭を振って否定する。
自分の存在は自分がよく分かっているのだから。
考えられることは助っ人を呼びにいったか。
それから暇潰しをすること一時間。ようやっと外が騒がしくなってきた。
足音は二人分。やはり助っ人を呼びに行ったのが正解だったようだ。